〈特別講義報告〉

「田中親美復元模写本について」

講師　田中　重氏

平成十六年一月二十四日（水）東京都渋谷区の田中重氏邸において、午後一時三十分より約二時間にわたって行われた。参加者は大東文化大学大学院文学研究科書道学専攻修士課程一年生在籍者全九名、および大学院担当専任教員四名の都合十三名であった。今回の講師田中重氏は、平安古筆の復元模写の偉業を残した田中親美翁のご長男で、自らも親美翁の指導により料紙装飾などの制作に協力的な立場で携わっていた。その体験などを交えて同氏の解説により、田中家所蔵になる田中親美制作の復元模写本を実地に見学させていただいた。同時に復元模写本が出来るまでの料紙装飾下絵双鉤本をサンプルとしながら技法面を中心に懇切な説明があった。復元摸写本が成るまでの料紙装飾のみならず、原本の書をいかに正確に捉えるべきかという点においても、親美翁生前の研鑽の実態を目の当たりにすることができた。まず、復元模写本としては、

① 法華経一品経（久能寺経）譬喩品　原本・静岡県鉄舟禅寺蔵
② 法華経一品経（平家納経）　原本・広島県厳島神社蔵
③ 本願寺本三十六人家集　原本・京都府西本願寺蔵

などを鑑賞することができた。①の原本は鳥羽天皇皇后であった待賢門院璋子の発願になる写経で、筆者は平安中期の能書・藤原行成を祖とする世尊寺家五代目の嫡男・定信の自筆として知られているが、この復元模写本は料紙装飾、筆跡ともに原本の特徴をよく捉えており、真に迫るものがあった。②・③はともにその一部であったが、前者は金銀箔による装飾、彩色豊かな下絵や表紙・見返し・本紙・紐・軸端などに見る美術工芸分野の遺例としても尊重されるものであり、後者は粘葉装による染紙・唐紙を土台とし、また切り継ぎ、破り継ぎ、重ね継ぎなどの料紙装飾に特色が示される。これらの田中親美復元模写本は、原本の代替品として、現在でも博物館・美術館において展示がなされている。そうした復元模写本制作の下地となったものもまた、参考品として拝見することができた。それらは、

① 久能寺経譬喩品本紙料紙模写用下敷紙
② 平家納経表紙見返元本写并模写用下敷紙
③ 古筆類集～硫酸紙による古筆の透き写し（高野切古今和歌集、寸松庵色紙ほか）

などである。①および②は、和紙による透き写し、③は硫酸紙による透き写しであり、親美翁が平素、古筆類の模写を遂行するための研鑽の一方法を確認できた。とくに前者は、金銀切箔・砂子・野毛などの撒布状況を把握して復元するための下敷きで、親美翁による復元模写本制作の苦心の跡が窺えた。このほか、参考品として、

① 紺紙金字神護寺経
② 明恵上人筆跡

といった、平安末期～鎌倉初期の肉筆遺品も拝見できた。

田中重氏の講義では、体験に基づいた料紙装飾技法について、とくに詳細な説明を拝聴することができた。それらについては、すでに『料紙装飾　箔散らし』

（江上綏・『日本の美術』№三九七・至文堂・一九九九年）の中に特別寄稿「料紙装飾における箔の技法」（田中　重）でも触れられており、以下、同稿を参考までに抄出させていただき、当日の講義の一端を再現したい。

（一）箔について

「箔」は金属をきわめて薄くのばしたもので、それを様々な大きさに切ったり、ちぎったりしたものを料紙装飾に使うことがわが国で古くから行われましたが、最も洗練した使われ方が発達したのは、平安時代の最後の世紀、一二世紀です。それも一二世紀半ばがピークをなしたように思います。「箔」には現在、金、銀、プラチナ、その他、真鍮や、アルミニウムなどがありますが、昔は金と銀だけでした。金もいろいろな金があります。銅をいれると赤くなり、赤みが増してきます。銀を入れると色が薄く白っぽくなります。青金とよばれるものは金に銀を少し入れたもので、青くはないけれども赤みが薄く、普通の金に比べると青い感じの色をしているものです。

金箔や銀箔の細かいものを布海苔（ふのり）に溶いて、それを指で皿に擦りつけてごく細かい粉にして膠とまぜると金や銀の絵具になり、これを金泥、銀泥といいます。これでお経の文字を書写したりしました。色が微妙に異なっているのは平安時代にはいくらもあります。はじめは自然にとれたものからそれを知ったのではないかと思います。金の精錬にしても昔は電気分解という方法はありませんでしたから、できたものには銅が含まれたものもあれば、銀やその他のものが含まれているものもあります。

昔は二四金の純金というものはありません。昔の金箔は銀入りの箔です。また昔の銀には金が少し入っていると思われます。ただの銀は時がたつと自然に黒っぽくなり、やがては真黒くなります。これを銀が焼ける、または焼けてくるといいますが、銀に少し金をいれると、黒く焼けないのです。黒さの強い銀と、弱い銀の両方が『三十六人家集』などにはあります。『久能寺経』などもいい色に銀が光っています。昔の銀には金が含まれているので『三十六人家集』やその他のものでも「箔」は何となく光って、何ともいえないいい色になっています。金箔はある大きさ（現在は一〇㎝とか一二㎝四方ぐらいのものが多い）に真四角く切って、少し大きい箔紙という薄い紙に一枚一枚のせて重ねた状態で売っています。現在の銀箔は、大きな薄い箔紙の間に乗せた大きな箔を、箔紙ごとその大きさに裁断して売っています。金銀の屏風などに使う箔はもっと大きな四角に裁断して売っています。

そのようにして用意された箔をあとでお話しするように様々に細工して散らして料紙装飾するわけですが、こまかく四角く切ったものもあります。ただし、針のように細かく切ったものは、「切箔（きりはく）」と言わず、「野毛」と言います。また、粉のように細かくしたものが「砂子」です。不定形の箔も使います。「裂箔（さきはく）」という不定形の大きな箔です。破ったような感じのものです。

（二）箔の散らし方

ある大きさまでの箔は、小さい篩（ふるい）で落すのですが、これを「振る」といいます。大きい篩は使いません。筒状の小さい篩でコツコツ、コツコツ叩きながら落していきます。網の目の大きさに応じたものだけが落ちていきます。また、野毛用の篩もあります。また、砂子などをごく限られた範囲に振るときは、先の細くなった篩を使います。様々な大きさの切箔、金と銀と、たくさん振りますから、篩を細かく分けてきちんと並べておかないと間違えます。金の大切（おおきり）を振っているつもりで違うのを振ってしまったということが起きます。そうするともう取り返しがつきませんから、その紙は駄目になってしまいます。……（中略）……箔を散らすのは、礬水（どうさ）を引いた上に散らすのが基本です。まず、紙の上に礬水を引きます。礬水というのは膠を水で溶いた膠液に明礬（みょうばん）を加えたもので、紙の表面を滑らか

にし、また、字などを書いた時ににじまないようにする働きと、箔を散らした時の接着剤の働きをします。

振り方の順序は、最初に砂子、特に銀の砂子が一番最初です。一度振ったら乾くまで放っておきます。それから形の具合を見ながら、何遍も振っていきます。そのようにして銀の砂子だけを振ってそれが終ったら今度は金の砂子を振ります。振る度に礬水を引きますから強い礬水ではいけません。またこれは砂子の場合だけですが、乾き上がりそうな時に浮いてしまうのを防ぐため砂子を押さえつけます。紙を上に置いて、上から馬連で擦ったり、手で擦ったりします。そうして砂子が終ったら、今度は一番細かい小切（こきり）です。銀の小切の次に金の小切。場合によっては銀と金を一緒に振ることもあります。一緒といって同じところへ一緒に振るのではありません。違うところへ振るのです。それが終わると今度は中切（ちゅうきり）、やはり銀、金の順です。そして大切というように小さいものから順に振るのです。

最後の大切が一番目立つものです。大切が一番目立ちますから、大切が終わらないと出来上がりの様子が整いません。砂子や小切は下地ですから、何となく下模様ができるだけで、大模様が整わないのです。銀の大切、金の大切を最後に置いていくのですが、これが仕上げですから一番神経を使います。……（中略）……

ただの白い紙に礬水を引き、具を引き、或いは色染し、墨流しをし、そしてその上に金銀の箔を振って装飾する。これはわが国だけに見られる美術的技法です。特に平安朝期のものは、そこに神秘的な優雅さがあります。当時金銀を使うことができた人々は限られた人々だったと思われますが、今、われわれは、平安時代のこうした美術品に直接会うことができるようになりました。この神秘的なみやびやかさを、心から味わいたいと思います。

（古谷　稔　記）